

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	新井 慎	指導教員 (主査)	立石 雅子

論文題目	健常者における動的な形状識別能と静的舌触覚閾値・口腔運動機能との関連 -研究用キット DF8 を用いた検討-
------	---

本文概要	
<p>【はじめに】 摂食嚥下のリハビリテーションは、運動機能とともに感覚機能の回復も目標とする事が望ましいとされている。しかし、摂食時に近い条件での動的な形状識別能の研究報告は少ない。</p> <p>【目的】 本研究では、口腔知覚判定研究用キット DF8 を用い、動的な形状識別能を測定し、テストピースごとの平均正答率や年齢群ごとの動的な形状識別能や静的舌触覚閾値、口腔運動機能、咀嚼機能、構音機能等との関連を検討することを目的とした。</p> <p>【方法】 脳卒中や口腔顎顔面領域異常等の既往のない 19 歳から 79 歳までの健常者 105 名を対象とした。対象に対して質問紙及び口腔知覚判定研究用キット「DF8」、SW 知覚テスター、口腔器官の運動、Oral DDK、キシリトール咀嚼力判定ガムを実施した。</p> <p>【結果・考察】 その結果、年齢が高くなると DF8 の正答率が低下するという明確な関係は認められず、DF8 でみた動的な形状識別能に対する加齢の影響は明らかにならなかった。健常者では、感覚や運動を複合することで動的な形状識別能は年齢が高くなっても、ある程度維持されるということが示された。また、DF8 の正答率は TP の形状によって異なり、形状の類似した TP に誤る傾向が明確に認められた。摂食嚥下障害者では、類似している形状の微妙な差異の識別はさらに困難となることが想定される。静的舌触覚閾値は年齢に伴って上昇したが、DF8 の正答率との間には明らかな関係を認められず、静的な知覚が良好に保たれている者であっても、DF8 の平均正答率が低い者も存在した。静的な感覚評価では評価できない動的な感覚の低下を DF8 が評価したことを示す結果が示された。多数の健常者を対象とした本研究から、DF8 を用いた動的な形状識別能の測定は、有用性のあるものであると考えられた。口腔運動機能では、動的な形状識別能と舌左右交互運動との間にのみ有意な相関関係が認められたが、構音機能や咀嚼機能との関連は明らかにならなかった。今後、摂食嚥下障害者を対象に形状識別能の実態を明らかにし、嚥下スクリーニング評価や食事形態、年齢、口腔運動機能、構音機能等との関連性について検討する必要がある。</p>	